
天狗岳

麻倉龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天狗岳

【Nコード】

N5660Y

【作者名】

麻倉龍之介

【あらすじ】

「俺は天狗になろうと思う。」
そんなことを言う加賀に連れられ
俺は孤独にも平和だった大学生活を
狂わされることになる。

人付き合いに違和感を感じる主人公「佐野」

人付き合いから浮いているクラスメイト「加賀」

人付き合いが好きな女の子「あやせ」の

喪失感にも似たユルい大学生活の物語

目指すは、毎週日曜、木曜日更新！
初めて書く小説です。

できれば別に短編も平行して
書いていこうと思います。

というか、使い方よくわかってないので
馴れるまで各話の分割、レイアウト、めちゃくちゃになるかもしれ
ないですが、

そこは成長を待ち、温かく見守って下さい。

当方は現在、大学二年生。

小説に関係無さそうなコメントでも

嬉し、悲しで歓迎を持って受け付けております。

なお、登場する人物名、地名、店名など
一切が実在のものとは関係がございません。

「天狗岳」はこの話を書く為に用意したつもりの
名前だったので、長野県八ヶ岳連峰に実在する山の名前でした。

残念ながら、書き終えるまでに登ることは出来なさそうなのですが、
書き終えた頃には、登山シーズンが来ているかと思えますので、
そうしたら、是非とも登ってみたいと思っております。

始まりなんて、こんなもの。(前書き)

目指すは、毎週日曜、水曜日更新!!
初めて書く小説です。

できれば別に短編も平行して
書いていこうと思います。

なお、登場する人物名、地名、店名など
一切が実在のものとは関係がございません。

「天狗岳」はこの話を書く為に用意したつもりの
名前だったので、長野県八ヶ岳連峰に実在する山の名前でした。

残念ながら、書き終えるまでに登ることは出来なさそうなのですが、
次の登山シーズンが来たら、是非とも登ってみたいと思っております。

始まりなんて、こんなもの。

帰る時間帯特有の人混みを抜け、吉祥寺駅の階段を下りた。

飲食店やコンビニの立ち並ぶ明るい道を2、3分ほど道なりに歩くと、

一カ所だけ、その明るさから隠れてるようにして立つ薄暗い一角があり

その前で加賀が「おうい、こつちだぞ。」と言って手を振っていた。どうやらここが、加賀の発掘した居酒屋の入り口らしい。

まるで異世界の入り口のような怪しい薄明かりを灯したその入り口は、

見るだけでガラガラという音の聞こえてきそうな引き戸になっていて、

その戸の上には長年掲げられてきた様子が伺えるくすんだ木の看板があり

そこには力強く「天狗岳」と刻まれていた。

戸を引き、中に入ると板前さんのいる寿司屋を思わせる清潔な雰囲気、

大学生が集まるような居酒屋にはつきものの「酔っ払いのバカ騒ぎ」とはまるで縁が無さそうだった。

その狭いわりに高い天井と、旅館の壁にでも飾ってありそうな水墨画の掛け軸に俺は圧倒され、

「加賀って意外とやるんだな。」と内心感心していたのだが、

「どうぞ。」と好青年を絵に描いたような店員に案内されたのは店の奥の方にある、のれんの掛かったところで、先ほどと打って変わった印象を与えるいわゆる「飲み会」を彷彿させる座敷の広がったスペースだった。

席まで着くと

加賀は「よし、じゃあ始めるか」と言っ

割り箸の袋をちぎって席替えのくじを作り始め、

俺たち五人はくじの出来るまで各々好きなように座った。

大学生活も二年目となり、もはや完全な倦怠期の毎日である。

受験生として志望校への熱い情熱を掲げた二年前の自分には誠に申し訳ないが、

最低とまではいわないものの、よく言ってもそこそこの大学生活であり、

あこがれのキャンパスライフとは似ても似つかない凡庸な毎日がデジャブのように続いている。

サークルは、入学当初に起きる勧誘祭りに乗せられて、

よし、ここで俺はバラ色のキャンパスライフをおくるのだ

と初詣の願いがごとく、強く神に誓いを立て

なかなか感じの良さそうだった某フットサルサークルに入ったが、性に合わず、セミが鳴く季節が来た頃にはすでに一切行かなくなっており、

大学生活が授業中心になった今でも、特別誰と仲良くすればいいのかがわからなかったのも、休みの日にわざわざ遊ぼうと約束することも、はっきり言ってほとんどなかった。

こういった人間すなわち俺は、乗り遅れたものなのだろう。

そうでなければ今回こうやって、加賀の開いたよくわからない飲み会に、

「今日授業終わったら呑みに行こう。」などと適当極まりない誘いかたをされるわけがない。しかも今日いきなりである。

そもそも、このメンツには一体何の繋がりがあるのだろうか、男3人、女子3人。

授業にはそれなりに出ているので、同じ学科の二人の顔くらいは知っているのだけでも、それ以外の三人は初対面だし、この会に自分が呼ばれた意図がさっぱりわからない。

合コンのつもりなのだろうか。加賀はやはり、よくわからない。

始まりなんて、こんなもの。(後書き)

始まりなんてこんなもの。

「最初のお飲み物のオーダーだけお願いします。」
先ほどの店員がメモを用意して待っていた。

「ああと。何にする？ビールの人、手上げて。」

と、加賀は慣れた風にみんなに聞くが、手を挙げたのは加賀ともう一人いた肌の浅黒い男子のみで、女子三人は「あたし、カシオレ」とか、「爽健美茶じゃだめ？」などと結構好きなモノを頼んでいた。

飲み会といえば最初はビールで、そのあとは吐くまで飲まされるもの
の

思っていたのだが、それは大きな勘違いだったようだ。

などと安心できたのもつかの間で、

一瞬、飲みやすそうなものを探そうとしたら

「佐野。お前もビールで良いよな？」と加賀に言われ、

「えっ、ああ」と生返事したら、

「じゃあビール三つ。それと、カシオレ二つと、あとは爽健美茶で。」

とあっさりビール組に混ぜられてしまっていた。

悪い癖だとも思いつけれども、よくあることだ。周りに流されることなんて。

飲み物が来るまでの間に席替えのくじをひいた。運が良いのか悪いのか俺は、一番壁側の席を引き当てる隣には、同じ学科の橋野さんが座った。

橋野さんも俺と同じであり目立つ方だとは言いがたかもしれない。メガネと三つ編みが定番で、本でも抱えてみれば絵に描いたような文学少女になること請け合いだ。

今日集まったなかでは橋野さんと加賀は、同じクラスだから名前くらいは知っていた。

むしろ名前くらいしか知らないのだが・・・いや加賀については名前以外知らないことにしておきたい。

「学食の湯飲み茶碗をどこまで高く積めるか」なんて挑戦を堂々として行って、挙げ句の果てには高く積み過ぎて、天井が邪魔だと文句をたれていたやつを俺は知らない。

と、（半分加賀に犯された）思慮にふけていた。

「ねえねえ、どうしたのさつきから、なんだか退屈そうだよ。せつかくだから楽しもうよー」

ふと気がつくと、向かい側座った女子が、やたら目を輝かせるようにしてこっちをのぞき込んでいた。

ほどよく染まった茶色い髪を肩のあたりでカールさせていて「大学生」といえばこんな感じなんだろうな、というのをいかにもイメージしやすい女の子だった。

「いや、昨日あんま寝てなくて。」

と、しどろもどろになりながらなんとかそのようなことが口をついて出てきた。

「本当？大変だね。バイト？」

「あ、いや。バイトはやってないんだけど、なんか色々やってたら3時になつてて。」

「そうなんだ。まさか、テスト勉強！？」

「いやいや、そんなにやる気満々の大学生活してないよ。」

「だよねー。けどそろそろやらなきゃまずいかも。日本文学とか一緒だよな。」

「覚えなきゃいけない用語とか凄いたくさんあつて本当どうしようつてなるよね。」

「本当に無理。どうにでもなれつて思う。」

「そんなこと言って、後で裏切る気でしょー。『ああ93点だった』とか言つて。」

「俺の目を見てよ。嘘言つやつはこんな目はしない。」

「んー？」

「そうやってわざとらしくうなりながら目をじつと見つめられた。」

「その子供っぽさが何とも愛らしかった。」

「我ながらいい仕事をしたと思う。よくやった。」

「そんな和やかな時の流れる今、」

「何故だか身体に、うねりたくなるようなむずがゆさで満ち足りてい」

た。

蚊にでも刺されたかな。帰ったら蚊取り線香を出そう。棚のどっかに去年の残りがあつたはずだ。

正直この子との会話を楽しんでいたかつたのだが、良いところで、頼んだ飲み物が出てきてしまった。

始まりなんてこんなもの。。。。

「それじゃあ乾杯しようか。ほら加賀、一応幹事でしょ。」
と目の前にいる女の子が加賀を促した。

加賀が親しげに呼ばれたことに、何故か無駄にむっとした。
いやいや、今会ったばかりの子に嫉妬だなんて、俺はそんな軽い男
ではない。

ダイヤモンド並に堅い男で寿命まで全うするつもりだ。

そのような俺の葛藤を余所に、加賀は手にしたジョッキを掲げて
「それじゃあ、今日はみんなの門出を祝して、乾杯。」
と言った。

???

っは？

- - - 乾杯。

数秒の間、みんな何が起こったのかわからないような顔をしていた。
俺もしていたはずだ。当たり前である。

いや、むしろ何の疑問も持たずに陽気に乾杯している目の前の女の

子について問いたい。

どうしたんだい？

さくらだったのかい？

一緒に盛り上がりすぎてあげるから謝礼を二人で分けないかい？

飲み会が始まるまで、

「せめて乾杯の音頭を聞けば、この集まりの意図が知れるだろう。」
と思っっていたのだが、

その大事な乾杯の音頭の意味がわからない。

誰か、言語学をぎりぎりこで通過した俺にもわかるように懇切丁寧に説明願いたいのだが。

まあ無理な話だろう。

しかし、期待が裏切られたのは俺だけでもないらしく、

「流されるまま乾杯をしてしまった。」

というのが隣の橋野さんにしても、

加賀の隣に座っていた知らぬ男子にしても
表情にしっかりと出ていた。

しかし、すぐにそんなことどうでもよくなってしまったのか
みんな一瞬ふふと笑うと、手にしたグラスをぐいとやった。

それにしてもよく考えたらアルコールを飲むなんて久しぶりな気が
した。

だから今のこの場、居酒屋に知り合い（もちろん初めて見る顔もい
るわけだが）

と一緒に料理を囲んで、お酒を飲んで、話すことさえも許されてい
る状況は

あまりにもうれしいことだった。

さて乾杯が済むと、追うようにサラダやポテト、スナック菓子のよ
うなものが続々と出てきて、
閑散としていたテーブルの上は遊園地のような賑わいになっていっ
た。

みんなの雰囲気も、まるでそれに習うように目に見えた盛り上がり
を醸し出していったのであった。

まるで人ごとのような感想だが・・・。

「それであ、この前バイト先にきたおっさんが・・・」
と例の浅黒い男が場を盛り上げようと
身の回りに起こった話をしている。

どこの飲み会でも同じ話をしているのだろう。
そうでもなければ、こんなにスラスラと面白い話が出てくるわけが
ない。

ときどきこういう時どうしていたらいいのだろうと思うことがある。

前にでて大げさにリアクションでもとればいいのだろうか。

いやいやそんなの見苦しいだけだ、

適当に愛想笑いをかまして、聞いてますよアピールだけしておくの
がベターだ

そんなことはない。

そんなことある。

いや、よくわからない。

盛り上がる場の中、顔面にくっつけた愛想笑いとは別に

猛烈な思考が脳内を駆け巡っていた。

どんな風に見えただろう。

いや、盛り上がっている集団の一人だろう。

始まりなんてこんなもの。。。。

しばらくの間呆けていると、

なにか可哀想な子の心配でもするように

「あの、初めまして。私、橋野といいます。」

と隣に座った橋野さんに自己紹介されてしまった。

「あつ、ごめん俺、佐野。」

無意識に謝りながら、こつちも自己紹介する。

本当に初対面になった気分だ。

「あの、何科の人なんですか？」

「えっと、演劇科で同じクラスなんだけど・・・。」

「えっ!?!?ごめん。私、人のこと覚えるの苦手で。」

どうやら、本当に覚えてなかったみたいだ。

一応入学したてのころにあった教授主催の新歓コンパで話した気もするんだけどな。

申し訳なさそうな表情が残ったまま橋野さんは続けようとす。

「加賀くんとはよくこうして飲んだりするの？」

「いや、初めてだよ。なんで今回俺が呼ばれたのかもよくわからないい。」

「そうなんだ。私もどうしてなのかよくわからなくて、どうしようかなくて思ったんだけど、

優子も呼ばれてたみたいだしいいかなって。」

「へえ。その優子って誰？」

「えっと、私と同じサークルの子なんだ。」と言って、

「ね」と橋野さんが隣にいた一回り小さな女の子に話しかける。

その子は振り返って「ん?うんどうも、初めまして。」

と少しハスキーな声で応えて、興味無さげに俺を一瞥すると

またさっきの浅黒い男がいる話の輪に戻ってしまった。

少し傷ついたがまあ普通初対面ってこういうものだろうと諦めて

「へえ、何のサークル？」と橋野さんに訊いてみた。

「映研なんだ。学祭で映画上映するんだよ。」

「へえ。」

さっきから「へえ。」しか言っていないかも知れない。

今度リアクションの勉強でもするかな。

話し下手はこれだから続かない。

そんな雰囲気伝わってしまったのか

気まずそうな微笑を一つくれると

橋野さんも、優子といった女の子のいる方を向いてしまった。

始まりなんて。

しごく取り残された気分を味わったものだ。

あつと気がつくと一人になつていたのでから。

いや正確に言えば一人ではなかったのかもしれない、

しかし、どうにも当事者感覚は心に芽生えなかった。

喻えるなら今俺は、会話というスポーツの中において傍観者という名の観客で、

点が入ろうとファインプレーが起きようと、

自分は「観ている」だけで、「そこにいる」だけなのだった。

この会話がサッカーだったならもう二点くらいは入っていると思う。それくらい盛り上がっていたし、時間もそれなりに過ぎていた。

それと最初にくじで決めた席はもはや意味を成していなかった。

トイレに立ったやつがいると思えば

そいつが帰ってくる頃にはもう別の人が座っているという有様でさしずめ選手交代といったていだろう。

俺の隣、橋野さんがいたところもさつきから、よくしゃべる浅黒い男に変わっていた。

「初めましてだね。何科？」そいつは山下と名乗った。

「あの、文学部で、演劇科です。」

じゃあ加賀とかと同じなんだね。

と言いながらなにやら真剣な顔をしている加賀の方を見やる。

「そうだね。」

「あいついつもあんな感じなの？」

「どうだろ。よくわからないけどそうだと思う。」
と、応えながら加賀を見ると、枝豆のカスを使ってなにやらアートのようなものを作り出している。

「まあ表裏とかなさそうだしな。」

「むしろ作る器用さがあるとも思えない。」

お世辞でもけなしでもない。率直なまでの感想だ。

ふつう天然とか変人とか、そんな言い方をすれば、

どこかキャラ作りをしているのではないかという疑いを抱かせるものだが、

ことに加賀の場合は生まれたときからああいう風だったのではないかと自然に思わせるところがある。

それを聞くと山下は鼻で笑うようにして話をそこで切り、

「なんか飲む？」

と聞いてきた。親切心に逆らうようで少し気がとがめたが、

どうも今は気乗りがしないので断った。

「あやせは？」と山下が今度は横を向いて目のキラキラした女の子に訊いた。

そこでようやく最初に声をかけてくれた女の子の名前がわかった。

あやせ、か。

「ん？ありがとう。」

といつてかの女の子は注文表を数秒眺めて、

「じゃあ、梅酒を……、ロックでお願いします。」

と少しおどけた風な言い方をして応えた。

その応えを聞くなり山下は

「すいませーん」と先ほどと同じ店員を呼び止めて注文していた。

その間隙を縫って「あの、あやせさんは何科なんですか？」と訊いたら、思わず声の上擦ってしまった。

女の子は一瞬びっくりしたような目をして、すぐ元の微笑するような表情に戻ると

「史学科だよ。優子と一緒に、あとこれも。」と言って、

からかうようにわざとらしく目を細めながら山下のことを指さす。

すると山下の方も「これとか言うなよ。」と慣れたように、わざとらしい表情を作って返していた。

席どころか、どれが自分のコップだかもわからなくなるに至って、長いこと枝豆と格闘していた加賀が、

とうとう飽きたのか、ふと顔を上げたかと思うと

「山手線ゲームやるうぜ。」と言い出した。

始まりなんて。

意外にもそんな一言で、

各々ばらばらに話して進んでいた飲み会が
にわかにもとまりを見せた。

山下が「じゃあ無難にまずは国の名前で」と
切り出し「あつ間違えたらグラス一気な。」と付け加えた。

始める前に全員分の飲み物を、追加で一揃い用意してもらってから
ゲームを始めると二周したところで
お題を決めた山下があっさり間違えて、
テーブル上のコップに残っていたカシオレを、
加賀とあやせの盛り立てるコールの中
一気飲みをさせられていた。

負けられない。俺は酒、弱いんだ。

三回目には「学食のメニュー」というお題であやせが負けて、
山下がお返しと言わんばかりに
あやせのグラス向かってこぼす勢いでお酒をつぎ足していた。

こういうゲームは負けた人が負け続ける

敗者スパイラルのようなジレンマがあるようだ。

そのせいか、山下とあやせの二人がやたらと何度も一気飲みさせら
れていた。

酔いとは怖いものだ、怖いものだ。

けれども悪いことばかりでもない。勢いがつくのだ。

さつきからそれを感じていた。

なんとまあそのせいかな、集団に自分が混じっているのである。少なくとも今、自分はぽつんとしていない。

それは、錯覚でも最初からそうであったのでもなんでもいい。

けれども、今自分がそう感じているということ、

それがどれほど珍しく、愉しく、そしてあっさりしているものか、ということに驚く。

そんな風に割り切れると、わいわいするのも悪いことじゃないなと感じてしまった。

残念ながら一回間違えてしまったのも、ある種幸運だったとも言えたかも知れない。

「じゃあ次はLucyのメンバーの名前で」と勢いよくお題を出すまでに至った。

「それじゃあ一周しかできないじゃん。」山下が返す。

「それで十分だよ。」含みのある笑いを見せながら返す。

「それじゃあ」

俺、山下、あやせと手拍子に乗って進んでいく、さあ来い。

加賀に番がまわると

難しそうな顔をしていた。

そりゃそうだ。加賀にはわかりそうもない。

「えー。じゃあ加賀、一気ね」あやせが愉しそうにグラスを渡す。

「やられたな、こりゃ」と加賀も笑っていた。

加賀は、つぶやくように

「いやあ、俺、酒苦手なんだけどな。」と言った。

意外なもんだ。まあ飲んでもらうことに変わりはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5660y/>

天狗岳

2011年12月18日09時55分発行